2023
1月号
第393号

教区だより

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

Shinran 850th

〈座談テーマ〉
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

今月の「ことば」

苦の原因
思い通りを
求める心

今月の「ことば」は、教区駐在教導が担当しています

CONTENTS

2面
連載 第二回
真宗教団の中の女性たち
見義 悦子（みよし えつこ）氏

3面
今、この時に、親鸞聖人に遇う
有賀 尚子（ありが なおこ）氏

4・5面
特集
得度にかける願い
育成研修部会

6面
教務所からのお知らせ
イマダカラ

京都教区内の風景をお届けしています。『教区だより』では表紙写真の募集を行っております。くわしくは、教務所、教区駐在教導まで。

見義 悦子（みよし えつこ）
（富山教区 正覺寺 副住職）

第二回　教団の女性観

教団の女性の位置が最も良く見て取れる資料がある。

①一八七九年（明治十二年）「女子の得度及び小教校への入学を認めず」（資料1）
②一八八二年（明治十五年）存覚の『女人往生聞書』刊行（資料46）
③一八九一年（明治二十四年）『坊守教誡聞書』発行（資料47）
④一九二五年（大正十四年）「坊守規程」発布（初めて教団の法規の上に「坊守」について定めたもの）（資料15）

①では一人の女性が真宗の教えに帰依して生きていきたいので、尼僧となって学問所へ入学したいと門をたたいた。それに対して、得度や学問所への入学はもちろん、将来住職になることも許可しないと指令されている。

②では『女人往生聞書』の中で四十八願の中の三十五願は、女人往生のためにたてられたものとし、罪障多き五障の身である女人は如来の慈悲による、変成男子往生が説論されている。

③では②をベースに女人教化論が述べられている。五障三従の女子の罪深さや、坊守に対して在家や男子にも勝る大罪の自覚を促し、後生を願う生き方が説諭されている。

④では②③の女性観をもとにした坊守像を明文化している。

私は一九四七年生まれで能登の小さな寺で育った。小さい頃、明治生まれの祖母や、大正生まれの母にことあるごとに「寺に生まれたのは在家のものより罪が深いから」、「在家へ行っても役に立たん」といわれたことが今も記憶に残っている。この言葉によって、ある意味で結婚は寺から寺があたり前となり、一方で寺から来なかった坊守に肩身のせまい思いを抱かせることにつながっていたように思う。この女性観の教化が能登の田舎の坊守にまで届いていたことが伺える。

①の女性の、並々ならぬ決意―真宗の教えに生涯出あい続けて生きていきたいという願い―を拒否したことは「真宗教団」とは何かということが問われた大変な出来事である。立脚地を崩されたその後の生き方はどうなっていったのだろうと想像すると胸が痛い。

それ以降、女性は得度も教師資格を取ることも許されなかった。一九四一年（昭和16年）初めて女性の得度が許されたが、戦地へ徴兵された住職の穴埋めとして許可されたのであり、その扱いは差別的であった。（資料8）

そして②や③の中での説諭によって女性に良妻賢母像を求め、女性を家庭に閉じ込めた。性別役割分担の固定化につながっていくことになる。

④の「坊守規定」はこれまで説諭されてきた女性観を明文化した形となっている。

「坊守は品行端粛（たんしゅく）克く教家の家婦たるの義務を尽くしその門信徒の模範たるはもちろん、仏祖崇敬法義相続において他に率先して自行化他の為に住職の内助を全（まった）からしめざるべからず」

坊守の役目は門信徒の模範となって住職を助けて跡継ぎの男子を産み育てることとしている。

こうして坊守は寺を留守にしないものとして閉じ込められた。唯一、坊守会への参加は大義名分が立ち、大手を振って出かけることができた唯一の機会であった。その日が決まれば、一週間ほど前から何を着ていこうかとワクワクしながら着物や帯を選んでいた母の姿が思い浮かぶ。しかし男性の教誡師は『坊守教誡聞書』の中で「全て仏祖よりの与えものなのに坊守は着物をつくることに使う」と戒めている。寺を留守にできないことで他者との関係が薄い坊守たちにとって、その聞法の場は「黙って教えを聞く」場であったが、そのあとは日常の閉塞感から解放されたうれしい一時であっただろう。

こうして良妻賢母として生きることが願われ、性別役割分担が固定化されることによって女性が教団に直接声を出す場と機会を持てない長い歴史があった。問いを持てないまま聞法道場（寺院）に身を置いてきたとも言える。

今なお女性が教団の正式な構成員となっていないと感ずることに通じる歴史である。あらためて「おおよそ大信海を案（あん）ずれば貴賤（きせん）・緇素（しそ）を簡（えら）ばず、男女・老少を謂わず、造罪の多少を問わず…」（信巻）という聖人の言葉に向き合っていきたい。※資料はすべて『女性史に学ぶ学習資料集（東本願寺出版）』による。

今、この時に、親鸞聖人に遇う

濁世を生きる

長浜教区 光了寺 衆徒　有賀尚子

昨年、私は、ＮＨＫの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にすっかりはまった一年でした。話は、鎌倉幕府が起こり、武士の世の中としての仕組みが成り立っていくまでの姿を、二代執権北条義時を主人公に、多くの坂東の武士が登場し、次々消えていくという目まぐるしい展開でした。私がこのドラマに惹きつけられたのは、脚本や配役もさることながら、ドラマが、親鸞聖人が比叡山での修行をされるあたりから関東で多くの方々と過ごされた時期に重なっていたからです。鎌倉殿の権力をめぐる争い、そして後鳥羽上皇が実権を握る朝廷の様子が描かれ、ドラマとはいえ、私にとっては、当時の情勢に想像するのに大変ありがたい設定でした。

ドラマで聖人が描かれるわけではありませんが、考えてみれば、この時期に聖人は『教行信証』を執筆されていたわけです。私は、親鸞聖人が過ごされた関東の地というところについて誤解していたように思いました。当時の関東には、あれだけの書物が書ける環境もあったということでもあります。『教行信証』は、一二二四年に書き上げられたとされますが、その少し前には、聖人を流罪にした後鳥羽上皇が、北条義時と戦い、結果、上皇は隠岐に流されています。また、義時が没するのは『教行信証』が書き上げられた年。そう見ていくと、聖人が、時の朝廷と北条の戦いなどをご存じなかったはずがなく、そのような中で、どのような思いで書いておられたのでしょう。

聖人が鎌倉幕府と関係を持っておられたということが、『口伝鈔』に書かれていることを思い出しました。「一切経御校合の事」ということで北条時氏から請われて参加しておられる記述がありますから、北条氏と何らかのかかわりもあったようです。

このような時代を生きられた聖人が、『教行信証』の化身土巻に「已にもって末法に入りて六百八十三歳なり」（『真宗聖典』三六〇頁）とあるように、この世が末法の世であるということを書いておられることは、聖人がまさに濁世を実感されてのことではなかったかと思うのです。

度重なる戦乱によって多くの人のいのちが奪われ、また、災害や飢饉など、さまざまな人々を苦しめる世の中。それは、まさに末法五濁の世そのものと親鸞聖人は肌で感じられたのでしょう。だから、そのような世の中を生きていくものには、「ただ念仏申す」あり方しかないと示されたのではないでしょうか。

煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

（『真宗聖典』六四〇頁）

この『歎異抄』のお言葉がしみてきます。

翻って、今日の日本や世界の状況を思うと、時代は、はるかに違っても、私たちの抱える問題は少しも変わらないのではないでしょうか。人間として何が正しくて何が間違いなのかわからないような世の中で、人々の分断が広がっていってはいないか、また、人々の心がどんどん孤独で寂しく、また、濁って来てはいないか。そんなことを思う時、聖人の時代、人々の苦悩に、ただ念仏こそが救われていく道であると説かれた聖人の姿に、言葉に、丁寧に向きあい、聖人に出遇っていくことが大切ではないでしょうか。

特集　育成研修部会

得度にかける願い

九歳から受けられる得度。宗祖の足跡をなぞり、幼少の頃より受けることが可能です。京都教区では育成研修部会が毎年得度学習会を開催しています。得度にかけられた願いを、得度の意義を、声明作法を懇切丁寧に学べる場として定着し、なくてはならない大切な場所となっています。そんな得度学習会の様子をお届けします。

育成研修部会では、毎年三月の終わりに二日間、得度学習会を開催しています。この学習会は、得度の意義と大谷派の僧侶としての基本的な行儀を習うことを趣旨としています。

考査内容が年齢によって異なるため、十四歳未満（以降、子どもの部）と十四歳以上（以降、大人の部）という二班に分けて日程が進みます。

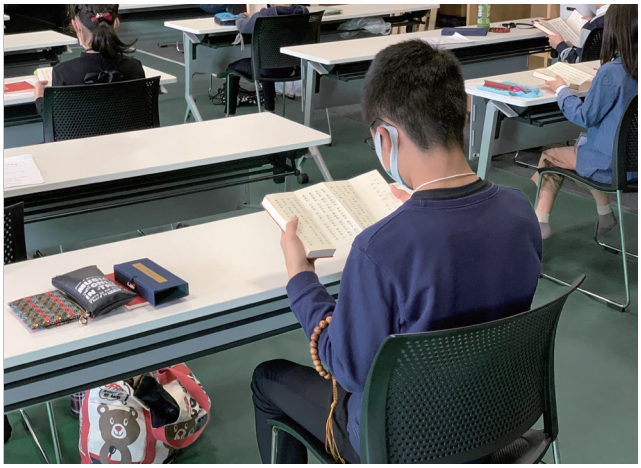
次に日程の内容ですが、まず講義（おはなし）から始まります。講義内容は「得度の意義について」ということで、近年は子どもの部は青少幼年部会の委員が担当し、大人の部は教区内の方が講師を担当しています。改めて自分にとって得度とはどういうことなのかを考えさせられる機縁となり、なんとなくお坊さんになるのだろうという受講者の思いを問われる時間になります。

大人の部の方々はそれぞれの目的や願いがはっきりしている場合が多いですが、子どもたちは得度ということを完全に理解し、どういうことなのかがわかっていない場合がほとんどかと思われます。得度ということを子どもたちにどのように伝えているのか。また得度を通してどのような願いを子どもたちにかけているのかということを、両親をはじめ家族も、そして得度学習会を主宰している我々スタッフも問われることになると思われます。

そういう点では得度の意義について講師のお話を聞き、改めて自分にとって得度とはどういうことかを問われることは、得度を受式するにあたって外すことができない貴重な時間になると考えられます。

次に声明練習（おつとめの練習）ですが、講師は本山本廟部の堂衆の方々が担当されます。一日目は「正信偈」草四句目下と「念仏讃」三淘、二日目は大人の部が「浄土三部経」、子どもの部が『仏説阿弥陀経』となります。声明の練習に関しては、この研修会で一から学ぶものではなく、事前に十分にお稽古をした上での参加が望まれます。しかしながら、身についてしまった読み癖や元々自己流で読んでいた場合が多く、最終日の考査に向けて、講師からの徹底した指導がなされます。十四歳未満の子どもたちにとっては、初めて本格的

に声明をお稽古する場であり、いつまでも忘れないような貴重な経験となります。昨年度も声明の練習時に、初めて会う子どもたちがお互いに仲良くなり、空き時間にお勤めの声がそれぞれに聞こえてくるのは微笑ましさを感じます。一方、大人の部の方々は自分の読み癖がなかなか治らず、ご苦労されている方が多いように感じました。



初日の日程の最後は、堂衆の方々の指導による装束作法（衣のつけ方）の時間です。「念珠の持ち方」、「直綴・墨袈裟」の付け方、畳み方を習いますが、仕付け糸の付いたままの直綴や、家族が長年着ていたと思われる古い墨袈裟など、多種多様な装束を目にしますと、我々スタッフとしては、お寺で練習してきてくれているのだろうかと多少の不安を覚えます。この時は、育成研修部会のスタッフも協力し、一人一人が装束や作法を身につけるようにサポートします。

但し、一時間という限られた時間の中でこれらのことを学んでいくため、この場ですべてを習得することはなかなか難しいです。しかしながら、念珠をはじめ装束を大切に扱う心を出発点となるべくこの研修会で感じることに意義があり、講師が丁寧に装束や作法をされる後ろ姿も学ぶべきことだと思われます。

二日目は真宗本廟の晨朝に自由参拝し、その後、お経の読み方の稽古から日程が始まります。子どもの部はゆったりとした時間の中で、『阿弥陀経』を練習し、時間があれば鑿の練習なども行います。子どもたちはそれぞれ興味深く鑿の打ち方を習っている場合が多く、二日目という打ち解けた関係の中で楽しく受講している姿をよく目にします。

一方、大人の部は『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』と三経のお稽古なので、時間一杯使って終了時間ぎりぎりまで拝読します。午後から得度考査を受ける方がほとんどなので、必死な思いで受講されている姿が印象的です。

以上のように、日程の流れに沿って得度学習会を見てきましたが、長いようで短い時間の中で僧侶となるべく研修を行うことは、単に得度考査のための試験対策というものではなく、同じく僧侶となる方々との出あいの場でもあり、出発点に立つ覚悟が問われる場だと感じています。

私自身も四十五年ほど前に、木造の京都教務所の二階で受講したことを今でもはっきりと覚えています。仁科和志先生は優しい語り口で子どもたちに声明を指導されていました。剃髪が嫌で重い気持ちで参加した私でしたが、そこで出会った同級生たちは意外にも、剃髪を苦にしていないことに驚いたことも覚えています。

昨年度はたくさんの参加がありましたが、新型コロナウイルス感染症対策のため例年よりも時間を短縮し、マスク着用で不自由な面もありました。その中で、休み時間に大きな声で声明のお稽古をしたり、お互い分からないところを教え合ったりしている受講生の方々を見ていると、未来の僧伽を見ているような気がしました。

今年度は三月二十九日（水）・三十日（木）に得度学習会開催を予定しています。得度を予定されている方に是非お勧めください。

育成研修部会 主査　平原 晃宗

本山からのお知らせ【重要】

○慶讃法要一般参拝に関するお知らせ

①各組団体参拝の登録完了に伴い、十二月一日より寺院・門徒単位での一般参拝の募集が開始となります。

募集期間は、二〇二二年十二月一日～二〇二三年二月中旬で、空席がある日に限り、先着順となります。

②お斎・慶讃寄席の申込は、空席がある日に限り、先着順となります。

③申込方法は、「一般参拝（指定席）申込書」（PDF、左記サイト参照）に必要事項を記入の上、団体参拝受入センターへ、メールもしくはFaxにて申込ください。

団体参拝受入センター
TEL：075-371-9212
FAX：075-371-9204
メール：honbyo@higashihonganji.or.jp

空席状況は、
慶讃法要特設サイトで
ご確認ください。

https://kyousan.higashihonganji.or.jp/news/1000381/

イマダカラ

八月に教区駐在教導の任を拝しまして、はや四ヶ月が経ちました。右も左もわからず、おぼつかない足取りですが、おかげさまでなんとか歩き始めることができました。

お話しをいただいた時点で、すでに遠慶寺住職の任を拝して七年以上経っていましたから戸惑いました。最初に教区駐在教導になってはどうかとお声かけいただいたのは、二〇一三年ごろだったと思います。日野前京都教務所長は当時教学研究所事務長で、私は教化伝道研修の一期生でした。これは立ち話程度でしたが、その頃から、教区駐在教導とはどういう職務なのかを気にかけながら過ごしてきました。私の知る教区駐在教導は、京都教区で六人。他教区の方の現状をお聞きすることは多くはありませんでしたが、経験者の談も含めて、できるだけ情報を集めました。しかし十人十色。ほかの住職や僧侶に聞いても、返ってくる答えはバラバラです。とうとう、どういう職務なのかはっきりしないまま、いまに至る、という感じです。

私の思い浮かべる教区駐在教導は、ともに教えを聞いていく場を開き続け、あるいは開かれた聞法の場を働き蜂のように転々としていく役割です。

教区内住職として現場に片足を置きつつ、広く教区の声、宗門の声を聞かせていただきたいと思います。今春の慶讃法要や、二〇二四年の長浜教区との教区改編の日も、いよいよ見えてきました。合併後は大谷派最大寺院数を抱える広域教区になります。地域の違いを聞き合いながら、「バラバラでいっしょ」に過ごしていきたいと思います。

（教区駐在教導　赤松 崇麿）

編集後記 The editor's note

毎年のことではあるが、一年を振り返ってみると様々な経験をさせていただいたように感じる。

昨年は、初めて自坊以外で法話をするご縁をいただいた。法話をするということで、上手く話せるか？緊張しないか？などといったことを、ついつい考えてしまったように思う。しかし、法話とは、お話を聞いてくださる方々に、親鸞聖人が残してくださったみ教えをお伝えすることが最も大切なのである。それは法話のみならず、声明もまたしかりである。

そして、私自身が親鸞聖人のみ教えを聞くという立場を忘れては、聞いてくださる方々には何も伝わらない。親鸞聖人はつねに「われら」と語り、自身を外に置いたような教えは説いてこられなかった。

新たな年を迎え、改めて親鸞聖人のみ教えを一生懸命に聞いていく所存である。

（出版部会　井上 至）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
『教区だより』第392号
[発行人] 篠岡誓法（真宗大谷派京都教務所長）
[発行所] 真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel:075(351)5260　Fax:075(351)5256

【表紙の写真】新春 島根県浜田市三隅町大麻山にて（石東組 善徳寺 河野恵嗣）
発行日 2023（令和5）年1月1日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 Webサイト
https://www.k-kyoku.net
京都教務所　検索